

希望の灯火を

未来へつなぐ

3月25日から全国各地で東京
2020オリンピック聖火リレー
が始まりました。

鹿児島県では4月27日、28日に
行われ、長島町からも長元信男
さんが聖火ランナーとして選ば
れ、見事な走りをされました。

今号では、聖火リレーを長元さ
んとの対談形式で紹介します。

東京2020 オリンピック 聖火リレー

特集



沿道の声援に応える長元さん

走る前の心境を 聞いてきました

Q 聖火ランナーとして選ばれたのはいつですか。

長元さん 令和元年12月12日、出張帰りの新幹線の中で連絡を受けました。「聖火ランナーに選ばれました」と聞いたときは嬉しすぎてデッキの中で思わず万歳してしまいました。

Q なぜ聖火ランナーとして走ろうと思ったのですか。

長元さん 実は昭和39年の東京オリンピックで、当時高校2年生だった私は聖火リレーの伴走者として走ったことがあります。その感動が忘れられず、「いつか聖火トーチを自分で持って走りたい」とずっと思っていました。まさか選ばれるとは思っていませんでしたが、光栄でした。人生で2度も聖火リレーを走ることができるのであります。

Q 本番への意気込みを。
長元さん 前回の東京オリンピックは戦後の復興、日本の経済成長に大きく関わったと思います。



前回の東京オリンピック当時の長元さん(上段左端)

長元信男 さん
昭和22年生まれ
(現在73歳) 薄井



今回のオリンピックも前回と似ており東日本大震災をはじめ、新型コロナウイルスなどからの復興の一助となるでしょう。国に大きな影響を与える一大イベントに人生で2度も関わられることは本当に幸せです。これも今まで生きてきた中で、家族をはじめたくさんの方の支えがあったからこそ。その支えへの感謝の気持ちを持って走りたいです。

会場には塩田康一鹿児島県知事も駆けつけました。

長元さんのご紹介
走るのが好きで、高校入学後、駅伝の魅力にとりつかれる。県下一周駅伝や長島一周駅伝に選手や、コーチ、監督として携わる。スポーツを通じて青少年の健全育成、地域社会との交流に貢献。



リレー当日は出水市中央公民館を出発し、特産館いずみまでの約2kmのうち、長元さんは最終走者として、堂々とゴールしました。
2日後の4月30日、長元さんは聖火リレーの感動を伝えるに川添健町長を表敬訪問しました。

Q 走り終えた感想を聞かせてください。

長元さん 新型コロナウイルスの影響で実施されるか不安でしたが、本当にいい思いができました。夢のような時間でした。

Q 沿道からの声援は。

長元さん 前回は黒之瀬戸大橋もかかっておらず、長島からはほとんど応援がなかったと思います。今回は家族や、同級生、職場の人たちなどたくさんの方が応援に駆けつけてくれました。心からうれしかったです。

Q 走った姿を誰が一番見せたかったですか。

長元さん 妹が昨年7月に亡くなりました。私が走ることをとても楽しみにしていたので、昨年開催されていればと何度も思いました。天国の妹へ、しっかり走ったぞと伝えたいです。

長元さんがつないだ聖火は全国各地をまわり、7月に開催地の東京へつながります。



町内全小・中学校へ 聖火トーチが繋がりました

5月21日から6月11日まで、長元さんの計らいで、未来のある長島子どもたちに聖火リレーで使ったトーチに触れてもらおうと町内全小・中学校へつなげられました。

蔵之元小学校では昼休みを利用して、子どもたちが集まり順番にトーチに触れました。思っていたより軽い「すぐかっこいい」という声や、最後には質問がたくさん出てきて、オリンピックやリレーについて興味津々の様子でした。
リレー本番にはランナー以外にもたくさんの方が関わり、長島の子どものたちも出発式でのパ

フォーモンスや伴走者として参加しました。長島中学校吹奏楽部はリレー当日の出発式のパフォーマンスで見事なダンスを披露しました。部長の小川姫佳さんは「1週間前にリハーサルを行って振り付けの練習をした。本番はちょっと緊張したけど、それ以上に楽しめた」と笑顔で話しました。
将来、長島の子どものたちがオリンピック選手や聖火ランナーとして活躍するかもしれません。そんな明るい未来がある長島の子どものたちへ長元さんの灯火が繋がりました。



川添町長を訪問した長元さん(写真右)